

視 角

アート活動の「やりたい」をどう見るか

八木紘一郎

「〜したい」欲求行動は「人になる」原動力

人は、誰もが生命を得た時から「生きる」欲求行動を表出・表現し続ける。人は赤ちゃんの時から、生涯にわたって、生理的・精神的・社会的・文化的な各側面の次元の欲求行動によって成長発達し続ける存在である。そして、「〜したい」は自己実現欲求の次元へと向かう存在である（A・H・マズロー）。さらに、人は誰もが生まれながらに、不快を快適化する自己調整の能力（ホメオスタシス）を機能として自律神経にもっている。「〜したい・やりたい」欲

求行動は「人が人になる」力の原動力である。

「ホモ・ファールベル」

太古の人々が、洞窟壁画に描いた野牛やマンモス絵の前で、まさか鑑賞会をしていたわけではない。描いた動物絵は、狩猟対象の行動特性の理解、命懸けの協働・連携の仕方に関する情報交換、模擬演習に活用された。さらに自然への畏敬や豊穡祈願・安全祈願など、生きる力を奮起させる目的共有に使われた。言葉の不足や壁を超えて、共存共生して生きるために「人になる過程でアートを賢く活用する」知恵を駆使して「人になる」歴史をたどってきた存在（ホモ・ファールベル）であることは今も変わることはない。

さらに私たちは、子どもの生誕とともに、感覚運動統合や表象的思考を培い成長発達をサポートするアートとしてガラガラやモビールなどの「おもちゃ&絵本」を積極的に活用している。私たちは、「おも

「ちゃ&絵本」アートの活用が子どもの基本的な諸能力の陶冶に必要不可欠であることをよく知っている。

見えないモノゴトの可視化のために

また、人類の賢さは、重要なモノゴトのほとんどが目には見えない不可視であるために、目に見えるアート活用を工夫して社会生活を営んでいる。

○人の心の内・心理・イメージ・思想・計画・構想

○自然の摂理などの科学的な諸法則・原理理解

○言葉の障壁を超えた多文化・異文化理解

○暮らし・社会生活のルール・協同・協働や意思伝達・

情報交換

○ミクロ・マクロの世界（原子・細菌・医療・宇宙

世界）理解

これらのために、絵文字・文字・マーク・標識・多様な図記号・図像をデザインして使われている。

子ども園生活も小さな社会である。そこでは、マーク類、運動会などのイベント運営に使用する流れ図、

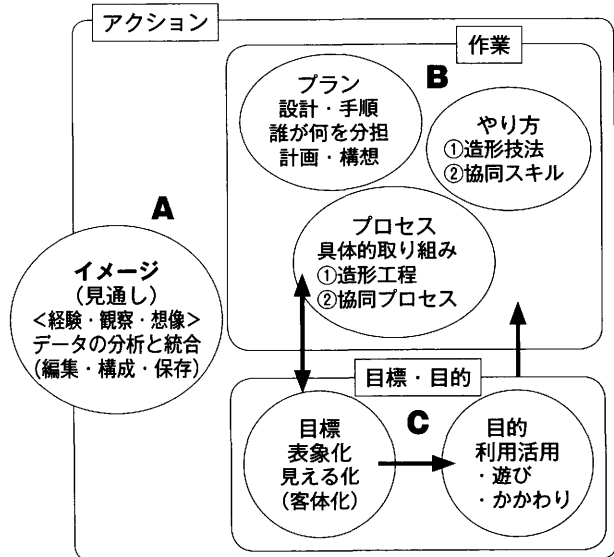
旗やシンボルが使われている。協同的遊びのシンボル（お店屋遊びの看板や品物）を製作したり、描いたりし、劇遊びに活用して伝達・協同・協働連携する社会スキルを培うことにつなげている。また、風車や紙ヒコーキや風揚げの凧などを作って遊びながら、動力や引力や揚力などの科学学びの基礎を培うことに役立てている。

子どもの「やりたい」欲求対象

アート活動の「やりたい」行動を左右する項目は3つのアクション（活動・行動）に分解できる。それは大別するとイメージ（見通し）〔A〕、作業〔B〕、表象目標・目的〔C〕である（次ページ図参照）。

イメージ（見通し）〔A〕とは、表現主体である子どもが「やりたい」ことのイメージ（見通し）を考えてまとめるアクションで、目標・目的〔C〕、その実現作業〔B〕を経験・観察・想像などを通して分析統合する。また、イメージ（見通し）は、造形技

アート活動の「やりたい」行動を左右する項目



法系と協同スキル系についてである。前者は造形プラン・やり方・作成作業のプロセスで、後者は造形活動を仲間と一緒に取り組む際の協同スキルのことである。アート活動に対する苦手意識は、これらの作業やスキルのイメージ（見通し）をもてないことが原因であることが多いので、しっかりとるよう

に援助することが必要である。

次に「B」は、「やりたい」ことの作業対象である。それはプランとやり方とその作業プロセスである。何を・何のために・誰と・どこで・いつ・何を使ってどのようにやるかなどを調整・計画作成するプラン、材料用具の使い方や技法である。特に「いっしょに」（共同・協同・協働）に際しては、設計図や模型・作業の流れ図などを使って、イメージ（見通し）を共有する方法を知る必要がある。子どもの「いっしょに」「やりたい」気持ちを大きく左右するからである。

そして「C」は、表象化の目標と、それを活用する目的のアクションである。例えば、お店屋さんごっこ、の品物作り（目標）と、それらを使った売り買いの遊び（目的）である。多くの遊びの造形は、遊ぶことが目的で、造形はあくまでも目的実現のための目標である。それを逆転させないことが肝心である。そして、アクション全体は、作っては遊び、遊んで

は作りと「C」から再び「A」「B」へと循環しながら新たな発想や修正が加わり展開していく。

「やりたくない」から学ぶこと

子どもの「やりたくない」意識は四歳児ごろから見え隠れしながら複雑化する。「やりたい」の裏返しの場合もある。また、前述のアクションが原因による困惑、回避・拒否の自己防衛、SOSの発信であるかもしれない。さらに、子どもの知的発達に伴う様相である場合もある。

知的発達に伴う側面は、例えば、走っている動きのポーズの人型を描きたいのに、表象結果とイメージとのギャップの気付きによる困惑であり、また、自分の表象と仲良しの他者仲間との間に広がる表象世界の微妙な違いに気付いた衝撃による。そこから多様性や個性として肯定的理解に至っていないためである。

子どもの存在価値の多様性理解と、その多様性と

の協同欲求を実現させる方法習得を求めるニーズでもある。適切な協同スキルを獲得させるチャンスである。このタイミングを逃すと、多様性を認め、生かし合うことができずに、アクション工程の各部分で起きる微妙な違いを理由に、批判、侮辱、排除、対立などの混乱が必然的に多発する。そして、このような混乱が意味するのは、それらの不愉快な状況回避や自己防衛、助けを求めるSOSであるかもしれない。

指導者は、アクション全体を振り返り、どこを調整したらいいかを当事者の子どもと共に模索して「これならやれる」小さな成功体験を積み重ねながら解決的方向を目指す活力を培うチャンスであり、子どもが直面する困難や課題を解決的に自己調整する力を培い鍛える絶好のチャンスである。こうしたチャンスに、指導者は前向きなイメージ（見通し）をもたせる調整行動を発揮することが望まれる。

（東京未来大学）